

## 歌謡曲の歌詞と音価の関係性の時間的推移

米田 諒

日本の歌謡曲の歌詞の構成単位とその構成単位に対応するメロディー部分との関係を定量的に解析する方法を提案し、この方法によって日本の歌謡曲の時代別の変容を明らかにした。解析対象は1980年から2009年までの「曲に歌詞がある日本のポピュラーミュージック」とし、該当期間の1~3年間隔の合計15回分のヒットチャート上位に現れる日本の歌謡曲を各年から10曲ずつ選択した。またヒットチャート上位の楽曲であっても、洋楽や歌詞がないインストメンタル曲は除外した。

具体的には、歌詞と曲の対応関係の定量化の一手法として、歌詞の構成要素である発音単位とそれぞれの発音単位に付加されているメロディー部分の音価の関係を調査した。ここでは歌詞の構成要素として、日本語にはモーラ、英語には音節を用いることにした。そして各音価の発音単位数を計測し、音価をいくつかの範囲ごとに区切り、それぞれの範囲について発音単位数を算出した。それを基に、(1) 音価範囲毎の割合、(2) 発音単位当たりの音価、(3) 楽曲のテンポ、(4) 発音単位当たりの継続時間の4指標の平均および標準偏差を算出し、歌詞とメロディーの関係を定量的に表現した。これらの各指標について1980年から2009年までの変動を調べた。

その結果、(1)からは、歌詞の構成要素に割り当てられる音価として、16分音符から4分音符までの範囲で特徴的な変化が見られ、日本の歌謡曲は全体の傾向として、1/8の音価を主体に制作されていることが判った。また、(A) 1/16以上1/8未満の音価に対応する発音単位の割合は、1990年代前半までは減少傾向にあるが、その後上昇し、2005年以降、1980年前後の値に戻っていることと、(B) 1/8の音価は最も変動が激しく、最低が1997年で36.6%、最高が1992年で69.4%だったこと等が判った。(2)からは、平均音価は、1980年から2009年まで全年にわたり8分音符から4分音符の音価の範囲に収まっていること等が判った。(3)からは、楽曲のテンポは1990年代に下降を続け、2000年以降上昇に転じたこと等が判った。(4)からは、平均継続時間は年々減少傾向にあり、歌うスピードはそれに伴い年々早まっていること等が判った。

このように本研究は、歌詞の発音単位とメロディーの音価の対応関係を解析し、1980年から今日までの歌謡曲の傾向を明らかにすることによって、時代ごとの大衆の音楽的嗜好の変動を定量的に表現した。

また本研究の成果は、( ) 好きな楽曲やアーティストを基にそれと似た音楽的特徴を持った楽曲やアーティストを推薦するシステム、および( ) 作曲家の楽曲制作システムへの応用が考えられる。

(指導教員 真栄城哲也)